

神田通信

●歌稿の締切は、毎月10日（本社必巻）です。郵便事情が悪くなっています。余裕を持ってお送りください。

●原稿は、2000字詰めの本社作成の原稿用紙か、これに準ずるものを使用すること。

●原稿用紙の注文・見本誌希望等は、阿藤たつるまで。

原稿用紙は一冊250円、それに送料がかかります（本誌「クリップ」参照）。見本誌については基本的に余ったバックナンバーです。無料ですが、送料として210円分の切手（二冊まで）を同封してお求めください。

●地中海誌の発送担当は、2月号から阿藤たつるに替わりました。何かございましたら、遠慮なくご連絡ください。

960-062伊達市本町30 藤田方
阿藤たつる
TEL & FAX 024-583-2158
Eメール fujitams77@gmail.com
【地中海社】

◆オドリコソウが咲いていた。ドガの〈踊り子〉と思つたら、「牧野植物図鑑」によると〈笠をかぶって踊る踊り子〉だった！

◆昨年の六月に始まった歯の治療が佳境を迎えている。今頃になってようやく、歯科医師の目標が理解できた。そういうことか。

◆息子が高校に入学して一週間。毎朝ネクタイを何回も結び直している。電車通学に慣れるのと同じで決まるとどちらが早いかな。

◆四月一日から自転車に背切符制が導入された。車道走行は恐ろしいが、七十歳以上は適応外。どうやって識別するのか気になるが、見たらわかるでしょう！なるほどです。

◆寒い間、縮こまっていた山法師の枝が芽を出したと思つたら、一気に若葉を広げてみどりの樹に。毎朝、仰ぎ見て、心も伸びやかになる。

◆書類の断捨離をしつつ捨てら

れぬもの。地中海の方々の心の詰まった歌集評や手紙の数々。今更ながら結社の仲間には有り難いものです。

◆何を書こうかと思案しているうちに四、五日が過ぎてしまった。かくして意味不明の文章を連ねて今月の通信はやむやにするにとした。

◆楠若葉の樹下、春の落葉がぬれている。雨が上がり、明るい青空。こんな明るさの中にも人の死はあるのだという当然をぼんやり考えている。

◆編集会議で約半年ぶりに本社へ。改めて藤森さんの不在を実感した。あの豪放な笑い声と眼鏡の奥に光る眼差しに出会えないのは何とも寂しい。

◆今号の編集作業は、4月14日に。全国大会の打ち合わせもあり、福島から藤田美智子さんが出向いてくれました。

◆藤岡美幸歌集「夏からの手紙」の批評号。還暦を迎えての歌集は、これを一つの区切りとして、新たにこれから生きていこう

とする歌集。

◆「第一歌集を読む」は、山元富貴歌集「あわきむらさき」。平成3年の発行は、作者が結婚して一年後でした。金近敦子さんが溢れんばかりの思いで執筆してくれました。

◆地中海叢書の出版が相次いでいます。7月号では藤豊彦歌集「月下のくろうさぎ」、9月号では市原やよひ歌集「海の光」の批評を予定しています。

◆8月号は全国大会の報告とともに、藤森巴行さんの追悼号の予定です。今号がお手元に届く頃は歌会葬の一首募集の締切にまだ間に合うかもしれません。

5月号の案内を確認の上、投稿をお急ぎください。お待ちしています。

● 本社編集日（予定） ●

6月12日（金）
7月14日（火）
8月12日（水）
9月14日（月）

（久我）

靖子のくさむしと梅

滝田 靖子

『角川現代短歌集成』に、安田純生のこんな一首が載っています。「座を正し歌詠むべしと定家いふ 定家ならねは寝ころびて詠む」。なるほど。では参りましょう。

・もも色に染まりはじめる花見山花見叶わず友は逝きたり

Sさんの歌です。状況も、作者の心情も言いたいことも、とてもよくわかります。「花見山」というのは、写真家の秋山庄太郎が「福島に桃源郷あり」と称賛したことで有名な花の名所です。この「桃源郷」という言葉は魅力的ですね。使ってみましょう。こうです。

・今まさに桃源郷の花見山の花見叶わず友は逝きたり

ところで、私が一番気になっているのは①花見山の様子②友の逝去という二つの要素がぎゅうぎゅうに詰め込まれていて、窮屈な感じがするということです。いっそ二首に分けて、それぞれに焦点を絞るといいのではどうでしょう。

・梅さくら桃いっせいに咲き盛り花見山いままさに桃源郷

・来年はいっしょに見ようと約束した友のいない春。作者が一番言いたいのはそれだと思ふのです。むろん、花見山が美しいからこそ余計に淋しいのだということもわかります。では、どうすれば一首にまとめられるのでしょうか。やってみます。

・今まさに桃源郷の花見山一緒に見ようと約せしものを

「約せしものを…」です。敢えて言わない形にしました。

クリップ

■入会届・退会届について

葉書に、①氏名(ふりがな)

②住所 ③電話番号 ④生年月日

⑤性別 ⑥送本開始(停止)

月を記入の上、本社に提出してください。

①⑥の記入をお願いします。

②⑥の記入をお願いします。

急な送本停止には対応しきれませんので、ご了承ください。

■会費納入について

会費は、半年分、または一年

分を前納してください。

各欄の月額は次の通りです。

・A欄 二五〇〇円

・B欄 二〇〇〇円

・C欄 一五〇〇円

・購読 一五〇〇円

二十歳未満の学生は五〇〇円

です。(若い人たちは是非ご勧誘ください)

00160・4・179569 地中海社

振替用紙の連絡欄に内訳をお

書きください。支社・グループ

でまとめて納入していただけると幸いです。

■本誌の発送について

二月号から、阿藤たつるが宛

名シールを作成し、印刷所から

発送してもらっています。万が一、届かなかった場合には、担当の阿藤までご連絡ください。

■本社への連絡について

葉書か封書でお願いします。

電話はありますが、常駐する者がおりませんので、誰かが本社で作業している時にしか通じません。急を要する場合には、

・阿藤…TEL&FAX 024-583-2158

・久我…TEL&FAX 043-241-7925

までご連絡ください。



◆朝日 三月号 通卷三八七号 第三十三卷

編集発行人 外塚 喬

*外塚喬の歌(12)

「嘯み砕いていく死と酒」 寺島 博子
 外塚が「死への意識をどのように嘯み砕いていったのか、その過程を酒の歌を交えながら探ってみたい」として、第三歌集『戴星』から第九歌集『漏告』所収の歌を挙げながら考察している。

・いまはしき思ひ消したくて飲む酒にのま
 れしわれがぐらやみ帰る 『戴星』

・言ひたくても何も言へないときがある酒
 ばかりのんであるときがある

「自身の体を痛めつけるようにして飲まざるを得ないところまで追い詰められているのであるが、冷徹なまでに己を観察する眼差しを手放さない。」

・身をこがす火酒こそよけれ過去といふ過
 去が清算されてゆくんだ 『火酒』

「歌集名を含むこの一首には、力強く自らを説き伏せる口調に逡巡を重ねた心の道程が窺われる。」

・生きるとは迷路ゆくこと甘塩の干物をあ
 ぶりつつ酒をのむ 『漏告』

「生きるとは迷路ゆくこと」であるに違いないが、限りある時間の中でそれをじっくり味わいたいと思う。「甘塩の干物をあ

ぶりつつ」には、そうした心情が表れている。」

「いつしか辛苦を逃れるための痛飲からじっくりと味わう酒へと変わった道程を歌が語ってくれている」と結ぶ。

◆波濤 三月号 通卷三八七号 第三十三卷
 編集・発行 若菜邦彦 北谷尚也 中島やよひ

*勝穂の一首

・新しき万年筆にインキを入れそれより何
 もけふは書かざりき 『青馬を見む』

最近の
歌誌より

日 濤
 朔 波
 未来山脈
 (藤田)

「掲出歌の次に『肩書の無きわが名刺刺るときは他人のごとく手に持ちて見つ』とあることから、新聞社を辞めた年の作品であることがわかる。(中略)大抵何かをしないでとは歌につながってゆくように思うのだが、何もしないことを詠んで感動を与えているのである」と読み、持田勝穂の次のような歌も併せて紹介している。

・国を挙げてたたかひし日の勇猛をまたい
 つの日か美化されはせぬか

・充たされぬけふの終りに一本のマッチを

擦れば焰おとたてぬ

*一首鑑賞「わが感銘歌」 下田 秀枝

・末端の兵士は死刑、副官は懲役三年、参謀無罪

加古陽『夜明けのニューステスク』からの一首である。『きけわだつみのこえ』に

心を揺さぶられた加古が「紺碧の海」と題して詠んだ十二首中の一首であるという。

本歌集について、「ドキュメンタリーとしても価値がある」と述べる。

◆未来山脈三月号通卷七十八卷第八一二号
 編集発行人 光本 恵子

*視点 宮崎信義の歌(29)

「『太陽はいま』を読む④」

・靴は軽いのがよいと影がささやく私の足
 どりをよう見ている

・心配りは無用といい後からおいでと今度
 は影が先になる

「影とは、他者との関係で存在する、もう一人の自己のことであろう。一首目の靴

は、生き方の喩ととらえたい。」

・手は単純には挙げられぬしばらくは乾いた
 声にもはずんだ声にも

「社会に懐疑的な面を感じるが、しばらくは、の表現に、その後は時代に近寄って

いこうとする思いが込められている。」と紹介している。